

安田女子大学紀要 43, 1-8 2015.

同定理論と自己非自己理論

川 岸 克 己

“The Theory of Identification” and “The Theory of Self and Non-self”

Katsumi KAWAGISHI

要 旨

日本語における自己と非自己の対立現象の意味について論じる。まず、これまで明らかにしてきた日本語のさまざまな文法カテゴリに自己領域と非自己領域とを表す形式が並存して発現する現象を言語の存立理由と同義と捉えた。そして、言語の意味は情報の創造にあるとし、創造性理論である湯川秀樹博士の同定理論との比較検討を行った。同定理論は、異なる二つのものを似ているではなく同じであるとすることによって、今まで見出されなかった新しい認識を生み出す。言語もまた自己領域の情報に非自己領域の情報を結合させることによって、新しい情報の創造を可能にしている。この創造が言語の主体であるわれわれの生命を十全に発現することを可能にしており、自己と非自己とが対立して言語に存在する理由であると結論づけた。

キーワード：同定理論・自己非自己理論・同定・類推・創造

1. 問 題 提 起

日本語は、さまざまな文法カテゴリにおいて対立構造をなしている。なぜ日本語は対立構造をなすのか。その意味あるいは目的について説明することは簡単なことではない。しかし、数多くの二項対立現象は、そこに何らかの意味があることを想像させる。かつまた、そこに解明すべき意味があることを示唆している。

二項対立を分析すると、自己領域の情報と非自己領域の情報とに分けることができる。二項対立構造現象は、さらにそれぞれの文法カテゴリによってさまざまに意味を変えるが、ある情報を自己の領域の情報として扱う「自己」と自己の領域の情報として扱わない「非自己」とに区別して構造化する。となると、日本語には、自己と非自己とに分ける、なんらかの必要性があると考えるのが自然である。(注)

そもそも日本語、さらにいえば日本語を含む言語という機能は、細かい議論は別として、人間に備わった生態的な機能である。ということは、言語もまた生態的な呼吸や循環あるいは消化といった機能と同様、生きるための機能である。言語は、情報をやりとりすることによって、われわれが生きることを可能にする。言い換えるならば、言語が情報をやりとりすることによって、人間は新しい情報を創造し、生命の継続を実現している。この新しい情報の創造こそが言語機能の目的である。

創造の意味するところは広い。この世に存在していないものを創りだすことはもちろん創造だが、たとえば万有引力の法則の発見も世界認識という点において創造である。さらに、新しい製品を創りだすことや新しい世界認識を提示することなどばかりではなく、われわれが日常的に行う些細な行為のなかにもまた創造が存するといっている。その日常的な創造のなかに、われわれの言語がある。その創造する機能としての言語は、どのようなしくみによって創造を可能にしているのか。

創造について深く思索した人物に湯川秀樹博士がいる。湯川博士は自身の創造に関する思索を「同定理論」として体系化を試みた。ノーベル賞を受賞した中間子論の研究もまた偉大な創造の賜物であり、そういった科学的な発見の構造とプロセスを体系化しようと試みたのが同定理論である。同定理論は、ある異なる二つの事柄を関係づけることによって、新しい何かが創造されることを体系化しようと試みた。この、二つの事柄を関係づけることによって、新しい何かが創造されるという構造は、日本語の自己と非自己の構造との類似を感じさせる。なぜ日本語は自己と非自己とに分けるのかという問いに対して、この湯川博士の同定理論がなにがしかの示唆を与えてくれるのではないか。

2. 同 定 理 論

2.1. 同定理論とは

同定理論は、創造性の発現に関する理論である。博士は、理論物理学の研究過程のなかで、創造性とは一体何であるのか、どうしたら人間は創造性を発揮できるのだろうかという創造性の発現について問題を提起した。その背景には、科学技術の発達とは人間の創造性の発現の結果であり、創造性こそが繁栄を続けていくための最後の拠り所であるという考えがあった。

創造性とはなにか。この壮大な問いについて考えるために、創造性とはどのように創成されるのかについて、湯川博士は「同定」という概念をもって説明を試みている。

2.2. 同定とは

「同定」について、月を例に説明している。

「月」という言葉は月そのものと結びつけられている。遠い遠い古代の日本人が、月を見て、これを「つき」と呼ぶことにした。月という天体と「つき」という言葉とを「同定」(identify)したのである。それは多分、偶然的なむすびつけであったろう。

(湯川秀樹「同定の理論序章」『創造の世界 湯川秀樹自選集IV』p51)

言語論的な問題は別として、ここで定義される同定は、あるふたつのものが結びつけられることと、その両者の結びつけは偶然的なものであるということである。つまり、似ているという要件を必要としない。

では、創造性は具体的にどのような形で発現するか。

創造性の発現の具体的な形は何かということについて、昔からよく言われているのは、類推という知的作用の活用です。類推といわれているものの中で、一番簡単な形は比喩です。譬え話です。

(同「同定ということ」『湯川秀樹著作集4 科学文明と創造性』p.158)

また、

創造論というのは、要するに類推ということから話がはじまる。類推以外のところに手がかりはないのではないかとわたしは昔から思っていました。

(同『私の創造論』p.10)

創造性の発現は、「類推」によって可能となる。類推とはなにか。類推はどのようにして創造性の発現を可能とするのか。

類推が創造性の発現として機能するのは、今まで誰も気づかなかった類似性の発見としてである。それは一見まったく別と思われる、ふたつのもの、ふたつのことがらの間に、似たところがある、共通性があるという認識である、

(同「同定の理論序章」『創造の世界 湯川秀樹自選集IV』p50)

類推が創造的な力を発するのは、今まで誰も気づかなかった類似性を発見することによってである。似ていることを今まで誰も気づかなかったというのは、偶然の結果なのか。そうではなくて、類推が創造的であるためには、似ているというだけでは創造性を発現させることはできない。同定は類推によって可能になるとするが、同定は類推と同じではない。同定が類推あるいは比喩と異なるのは、

似ているというだけでなく、どういう点が同じかということに気がつくということが本質的に重要

(同「同定ということ」『創造の世界 湯川秀樹自選集IV』p79)

であるとし、同定という概念は、似ているではなく、同じであると考えるところにあると博士は主張する。

非常に荒っぽい言葉ですが、似ているものは同じだと思う、そう思うときに急所を押さえている、ポイントを押さえている、単に似ているという漠然たることではなく、二つのものを、どういう意味で同じと認めるか、その本質をつかむ。そういう心の働きから創造性の問題を解明しようという発想が、私の言う同定理論へと発展してゆくわけです。

(同「同定ということ」『創造の世界 湯川秀樹自選集IV』p79)

似ているものを似ているというのでは意味がない。似ているものは同じであると認識するところに同定理論の本質がある。とはいえ、もともと似ているものを似ているといったところで、これまた意味を持つことはない。

私のいう同定というのは、違うものを同じと思うということです。同じものを同じと思うのは意味がないのでありまして、どこか違う二つのものを同じと思うということです。

(同「離見の見」『自己発見』p216)

同定理論のさらなる本質は、似ているものを同じだということではなく、違うもの、異なるものを同じだと認識することにある。これは重要な点である。ここまで類推は似ているものを関係付けることによって、創造性を発現させようとしたが、そうではなくて、同定理論の要点は似ていないものを同じだということにある。であればこそ、誰も今まで気が付かなかったということがありうるわけである。

いずれにせよ、似ていないもの、すなわち、違うもの、異なるものを関係づけることが創造性の発現において重要である、ということが湯川博士のいう同定の真義である。

これについて、湯川博士は、別の角度からも説明する。

世阿弥という人は、非常にすぐれた思想家、あるいは芸術哲学者でもあるとっていいかと思います。(中略)最後の境地に近いわけでありましょうが、「離見の見」という有名な言葉があります。(中略)はじめはただ一心にやっているというけれども、実はこれは人が見たらどういうふうになっているだろうかという意識は、むしろあるわけです。自分は演技者であるけれども、自分は能をやっているのであるけれども、やりながら、これを見るところから見たならば、これは完璧な能になっているかどうかということが自分にわかる。見るのと見られるのが一体化しなければいかん、そういう意味合いだろうと思います。

(同「離見の見」『自己発見』p191)

湯川博士がこの世阿弥の言葉に見出したものは、自分の認識からいったん離れなければならないということであった。「見る」と「見られる」という、まったく別の、あるいは反対側から自分自身を見なければならない。同じではない、違うもの、異なるものとは、まず自分自身から離れて自分自身を見るという行為であるということでもある。創造性の発現においてわれわれにできることは、自分から離れること。これは自分を客観視するというのとは違う創造的な行為である。そしてさらに重要なのは、「見るのと見られるのが一体化」しなければならないとするところで、これがまさに同定である。まったく別のものを実はひとつのものなのだとする認識こそが創造であるというわけである。

ここまでをまとめると、同定とは、ふたつの物事に似たものを見つけることであるが、そのふたつの関係は、すでに似たものではなく、一見似ていないものであることが重要である。さらに厳密に言えば、似ているととらえるのではなく、同じだととらえることが同定の本質である。

この同定の具体例として、湯川博士はニュートンの例を挙げる。

ニュートンはリンゴの落ちるのを見て、なぜ月は落ちてこないのかと疑った。リンゴと月とは、まったく別物だと、それまでの人たちは考えてきた。ニュートンは両者の運動に共通するものを発見しようとした。

(同「同定の理論序章」『湯川秀樹著作集4 科学文明と創造性』p135)

リンゴと月の形状が同じであるということに、似ている似ていないという視点を向けるのではなく、リンゴと月は同じ力が作用するという点において同じだという類推から出発したところにニュートンの創造性の発現があった。

似ているのではなく、同じだと感じることにある。似ているものを似ているとしても、創造性は発現しない。異なるものを同じだとするところに創造がある。

では、まったく異なったものだけをただやみくもに同じだとすればよいのか。この問いに同じくニュートンの例で答えている。

ニュートンはお月さんとリンゴとを結びつけた、両方の類似性を見つけたわけではありますが、問題はどのような点で両者に共通性があると思ったか、つまり両者について同定されるべき本質が何であったかということが、決定的な問題であります。(中略) そうしたら何が同じか、何が同定されるべきか。ニュートンは、その時、同定されるべき本質をはっきりつかんだわけではない。しかし漠然とはしているが、何かを勘で知ったのである。その勘を、もっとはっきりした形にしなければならない。ニュートンがそこから出発して、結局において発見したものは何であったか。

(同「同定ということ」『創造の世界 湯川秀樹自選集IV』p85)

長い引用になってしまったが、湯川博士が同定の例として頻繁に挙げるのは、このニュートンの例である。ニュートンは、当初同定されるべき何かをはっきりとつかんでいたわけではないと湯川博士は考える。つまり、何と何を同定すればよいかを知ることとはできないというわけである。そして、湯川博士は、ニュートンがその同定されるべき本質を「勘」によって知ったという。

勘とはまた漠然とした物言いだが、勘というのはつまり、自らが予め想定することのできないものに何かがあると感じる力である。予め知り得ないものを知るというのは矛盾している。しかし、予め知り得ないものを知ろうとするのは矛盾だが、予め知り得ないものであるが故に、さまざまなふたつのものを同じであると結合させ続けようとする行為が、ここでいう勘のひとつの側面である。

さらに、ここでいう勘のもう一つの側面は、同定によってより高い創造性を実現させるべく高度化していくことにある。同じニュートンの例で、

ニュートンは両者の運動に共通するものを発見しようとした。彼が発見したのは、両者が同一の運動法則に従うことと、両者に同じ万有引力が働いていることであった。この場合の類推の過程は「比喩」や「模型」の場合よりも複雑である。「まわり道」をしている。リンゴと月とは円いものという以外は似ても似つかない。リンゴの落下運動と月の周期的運動との間に、直接的な類似性を発見することは困難である。ニュートンは速度、加速度、質量、力などの諸概念を媒介として、一見まったく違った運動に共通する本質の認識に到達したのである。

(同「同定の理論序章」『湯川秀樹著作集4 科学文明と創造性』p135-136)

リンゴと月は、「円いものという以外は似ても似つかない」というが、似ても似つかないというところをあえて同じであると同定することによって、同定は高度化する。高度化は、つまり回り道であって、その回り道とは、直感的な概念によって説明されるべきものではなく、さまざまな新たな概念を必要とすることである。同定は直接的な類似を発見することでもなく、同定によって何か創造性を有するものが直感的に得られるものでもないことがわかる。

2.3. 類推の論理構造（帰納、演繹、類推）

論理的に説明はつかないけれど、関係性を感じることが勘であるとするならば、注目すべきなのは、論理的に説明がつかないという部分である。論理的に説明がつかないということはどういうことか。

同定は勘だというわけであるが、湯川博士が同定と近い関係にあるとする類推、その類推と対照的な推論形式である演繹と帰納とを比較すると、その勘という漠然としたものが見えてくる。

推論方式といえ、もっとも代表的なのは、演繹と帰納である。そして、パースの表現を借りれば、第三の推論形式といわれるのが類推である。

まず、演繹は、自らの手中にある前提から妥当な論理的な規則にのっとって結論を導き出すことである。たとえば、Aの帰結としてBを導くことを可能にする。ほかの言い方をすると、演繹は仮定されたことの帰結を導く論理的な過程である。したがって、妥当な演繹は、仮定が真であれば、結論も真であることを保証する。そういった意味では、きわめて強い論理性を有するが、逆に新しいことに言及することができない。

一方、帰納は、いくつかの個別な事実や命題のあつまりから、それらの事実や命題に共通する性質や関係、あるいは要素を取り出し、一般的な命題や法則を導き出すことである。たとえば、AがBを必然的に伴うときに、Bのいくつかの事実や命題を挙げることによって、Aを推論することを可能にする。したがって、帰納はいくらかの後件を観察した結果として前件を蓋然的に推論する過程である。ただし、いくつかの事実や命題から得られた一般的な命題や法則は、集めた事実や命題に反するものを提示されるだけで、成立が危うくなる。そういった意味では、帰納は、いくつかの事実や命題から、新しい命題や法則に対して言及することができるが、その論理性はやや弱いものがある。

では、類推はどのように説明されるか。ふたつの事実や命題の類似性に基づいて、ある個別の事物から他の個別の事物について推論することである。類推によって得られる結論はたぶん蓋然的である。または、あるふたつの事実あるいは命題について、既知の情報を有する事実あるいは命題を利用して、その類似性によって、未知の事実あるいは命題について多分そうではないかと推論することである。Bについての説明として、Aを推論する場合、「AはBを必然的に伴う」の前提条件Aがその帰結Bから推論されることを可能にする。このように帰納と類推は「AはBを必然的に伴う」のような規則が推論のために使われる方向が逆の関係になる。

類推は、科学理論の形成、文学的な詩的表現、芸術の創意工夫などにおいて有効なプロセスであるが、論理的な誤りを生じやすく、論証力としては弱い論理である。



演繹 帰納 類推

この論理性の強弱と推論の結果の新規性の関係によって表現すると、演繹・帰納・類推は、論理性と新規性とが相反する関係になる。

確かに、類推は論理的に弱い推論形式である。しかしながら、その弱さが同時に予め知り得ないことを見出していく同定の強みとなる。

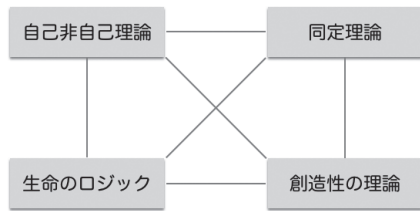
論理性の弱さは、いわば予測不可能であるということでもある。さらにその予測不能ということとは、新しい発見がそこに生まれてくる可能性をもたらすことでもある。

3. 自己非自己理論

湯川博士に予め知り得ないものについての言及がある。

未知なものがあるということがわかっているためには、すでにわかっている部分がなければならない。既知という認識がなければ未知もない。わかっているということがわからなければ、わからないということもわからぬ。

(同『創造への飛躍』p.147)



予め知り得ないものには、既存の推論に収まらない性質があり、同時に新規性を内包する。別の見方をすれば、予め知り得ないものがあるということを知るには、予め知っている部分を持つていなければならないということでもある。湯川博士は、知っていることと知らないことを対立させている。すなわち、自己と非自己の関係である。そ

して、これこそが創造の理論の基盤にあるものであり、既知のものに未知のものを結合させるという行為そのものが創造という行為にほかならない。

となると、自己非自己理論もまた創造性の理論である同定理論と同じである。言語の自己非自己構造もまた言語による創造の発現のための機能が顕現したものである。

言語が創造の機能を本質的なそれとするなら、創造性の理論にある本質は、生命のロジックとまた同じであり、生命のロジックは創造である。

本論の冒頭にて、言語は生態的機能であると措定した。言語は生命のロジックによって機能する生命の一部であるという意味である。

最後に、ここでとりあげた4つの異なる概念は、それぞれが関係付けられることによって、新たな概念を創造していく。この論自体、自己非自己理論と同定理論の、まったく異なるものどうしを同定した創造の試みでもあった。同定理論は世界を説明するための理論であると同時に、同定理論もまた創造の世界を形成しているのである。

注

日本語における自己と非自己については以下の拙論などにて論じた。

- ・川岸克己「語選択軸の策定－助詞・助動詞の対立構造－」『作新国文』7, 作新学院女子短期大学, 1995年12月
- ・川岸克己「助動詞タリ／リの対立構造」『学習院大学上代文学研究』第21号, 1996年3月
- ・川岸克己「なぜ、助動詞は「対」をなすのか?」『作新国文』8, 作新学院女子短期大学, 1996年12月
- ・川岸克己「＜自己／非自己＞構造としての敬語体系」『作新国文』10, 作新学院女子短期大学, 1998年12月
- ・川岸克己「＜自己領域＞分節構造としての指示詞体系」『学習院大学上代文学研究』第24号, 学習院大学, 1999年3月
- ・川岸克己「想起と発現－時制を表わすタ形式の本質－」『安田女子大学紀要』第35号, 安田女子大学, 2007年2月
- ・川岸克己「発現の助動詞「た」における情報の認知構造－情報のなわ張り理論との検討から－」『国語国文論集』第39号, 安田女子大学, 2009年2月
- ・川岸克己「言語に顕現するゲシュタルトとしての自己非自己システム」『安田女子大学紀要』第38号, 安田女子大学, 2010年2月
- ・川岸克己「自己非自己構造の意味－現象から意味へ－」『安田女子大学紀要』第40号, 安田女子大学, 2012年2月

参 考 文 献

- ・湯川秀樹『湯川秀樹自選集IV創造の世界』朝日新聞社，1971年3月
- ・湯川秀樹『創造への飛躍』講談社，1971年7月
- ・湯川秀樹『自己発見』講談社，1979年8月
- ・湯川秀樹『私の創造論－同定と結合』小学館，1981年12月
- ・湯川秀樹『湯川秀樹著作集4科学文明と創造性』岩波書店，1989年9月

[2014. 9. 25 受理]